

## Ф. И. チュツチェフ政治詩試訳(7)

大 矢 温

### はじめに

過去6回にわたってチュツチェフの政治思想を分析する素材となりそうな詩を選んで「政治詩」として訳をつけてきた。ただしその際、その「政治詩」なるものに厳格な定義をせずに、個別にチュツチェフの政治思想を表していると思われるものを選んできた。彼の政治思想を理解する上で重要と思われる、「ルーシ」とか「東」といった特定の単語を手がかりに、そういった単語を使った詩を「政治詩」として訳してきた場合もあるが、そうでない場合もあった。もとより一つの詩が「政治詩」であるか否かを判定する客観的な基準など存在しようがないが、「政治詩」として分析を進めていく以上、何らかの基準は必要であろう。

そもそも最初にチュツチェフの詩の中から一群の詩を「政治詩」として分類したのは、1905年革命後に「ロシアとドイツ」、「ロシアと革命」、「教皇とローマ問題」、「ロシアにおける検閲について」以上4編の政論を含むチュツチェフの著作集を編集したブニコフだった。彼は「叙情詩」とは区別して、この著作集に「政治詩」として54篇の詩を掲載している<sup>1)</sup>。「政治詩」と呼ばれた以上、ここに納められた詩は「政治詩」に分類することが出来よう。同様に「政治詩」ではないが「哲学詩」と呼ばれた詩もある。代表的なものとして、ソ連崩壊後にノヴィコフによって編纂された『ロシア哲学詩』に納められた34篇の詩<sup>2)</sup>、およびタラーソフ編集のチュツチェフ著作集『ロシアと西欧』に納められた162篇である<sup>3)</sup>。重複分をのぞくと173篇ということになる。これらの詩はその思想性を注目されたという意味で、チュツチェフの政治思想を分析する際に重視す

る必要があろう。その意味でこれらの詩は「政治詩」あるいは「哲学詩」というカテゴリーに入れることが出来る。

6巻本の『チュツチェフ全集』に納められている詩が全部で約476篇（数え方によって前後する）なので、全作品の実に3分の1以上が「政治詩」あるいは「哲学詩」と言うことになる。数の上からだけでもチュツチェフは一般に考えられている以上に思想的な詩人、ということになる。

以下、政治的、思想的な内容に注目された詩を引き続き解釈していくことにする。

#### 無題<sup>4)</sup>

全能でありながら我は弱く、  
 権力者でありながら我は奴隸、  
 成すのは善か悪か — それについて多弁を弄さず、  
 多くを与えるが、得るもの少なく、  
 我が名において自らを支配す、  
 何人かを打たんと欲すれば、  
 自ら我自身を打たん。

制作年は明らかではないが、チュツチェフの伝記作家のピガリョーフは1810年代後半と推定している<sup>5)</sup>。チュツチェフにとってはごく初期の、モスクワ時代の作ということになる。この詩は「私はツァーリ — 私は奴隸 — 私は虫けら — 私は神！」と詠うデルジャーヴィンの頌歌「神」（1784）を連想させる<sup>6)</sup>。少年チュツチェフが有限の人生と「私」に目覚め、強く自律を意識した様子がうかがえる。

プーシキンの自由の頌歌に寄せて<sup>7)</sup>

自由の火に燃えながら  
鎖の音をかき消して、  
豎琴に目覚めたるはアルカイオス<sup>8)</sup>の魂——  
そして隷従の埃はそこから吹き飛んだ。  
豎琴からは火花が走り  
すべてを砕く流れとなりて、  
神の炎のごとく、  
皇帝たちの哀れな額に降り下った。

幸いなるかな、確固たる、反骨の声にて、  
その位を忘れ、その王位を忘れ、  
頑迷なる暴君たちに  
神聖な真理を知らせるべく生まれしものは！  
汝は、この偉大な運命によって、  
おお、ミューズの弟子よ、顕彰された！

吟ぜよ、そしてたえなる歌声の力にて  
和ませよ、感動させよ、変えよ  
専制の冷たき友人たちを  
善と美の友人たちへ！  
だが市民の平安を乱すなかれ  
そして宝冠の輝きを陰らすなかれ  
吟客よ！皇帝の錦のもとで  
その魅惑の琴線にて  
乱さず、安んじよ、心を！

題名が示すようにプーシキンの頌歌「自由」(1817)をテーマにした作<sup>9)</sup>。「自由(原文大文字)を世界に称え、玉座の不善を粉碎したい」<sup>10)</sup>と歌い、自由と法の支配のためにフランス大革命を正当化するプーシキンに対して、この詩においてチュッチェフは、自由へのあこがれと暴君への警告者としての詩人の役割については共感を示すものの、現実政治への関与については否定的である。1820年秋の作とされている<sup>11)</sup>。ちなみに5年後のデカブリストの蜂起について彼は「1825年12月14日」を残している<sup>12)</sup>。

### 閃き<sup>13)</sup>

耳にしたらどうか、深いたそがれの中  
エオリアの豎琴の<sup>14)</sup>、  
震える弦の軽き音色を、  
夜半に不意に眠りが乱されたときに？……

あるいは震わせ、  
あるいは突然途切れる音は……  
その中で反響して、  
苦難の最後のつぶやきのごとくに、消えた！

ゼピュロス<sup>15)</sup>の呼吸はひと息ごとに  
その弦の中で深い悲しみを破裂させる……  
君は言う：天使の豎琴は  
塵芥の中で、天を恋しがっている、と！

おお、それなら地上界から  
霊となって不死界へと飛び立とう！  
過去を、友の幻のごとくに、

自らの胸に押し埋めたいのだ。

なんと生きた信仰で我らは信じるのだらう、  
なんと心は喜ばしく明るいのだらう！  
天は、エーテルの流れのように  
層脈に沿って流れていた。

しかし、嗚呼、我々はその運命ではない；  
我々は天上ではすぐに萎えてしまう、—  
取るに足らない塵芥に  
神の火を吸わせてはならないのだ。

我々はしばし努めて  
この幻想的な夢を、一時中断するや、  
おののき不安なまなざしによって、  
腰を浮かせて、天穹を眺めるのだ、—

そして一条の光線によって、  
たわわとなった頂に目がくらみ、  
再び倒れ込む、安らぎへではなく、  
退屈な眠りに。

パゴーゼンの雑誌『ウーラニア』の検閲日付から 1825 年秋前の作とされている。さらに全集の編者は同年ミュンヘンから一時帰国してモスクワに滞在していたチュッチェフがパゴーゼンに直接この詩を手渡した可能性を指摘している<sup>16)</sup>。ギリシア神話の神や天使、地上界と天上界、信仰や運命、そして夢、といったローマン主義の常套句がちりばめられている。それと同時に天上の世界を希求すれども地上の存在としてそれが適わないという筋立てもまた、当時の

チュッチェフを取り巻いていたローマン主義的な思潮の反映である。

### 最後の大変動<sup>17)</sup>

自然の最後の時鐘が打つとき、  
地上の各部分の構成は破壊される：  
見えるものすべてを再び海が覆い、  
神の姿がその中に描かれるのだ！

1829年以前の作とされている<sup>18)</sup>。「日半ば」<sup>19)</sup>においてもカオスの状況がテーマになっているが、この詩において描かれているカオスは、弁証法的活力を失った「日半ば」の「まどろみ」ではなく、地上の秩序を破壊し飲み込む、黙示録的な海のカオスである。創作時期を考慮に入れば、この詩がデカプリストの蜂起やヨーロッパ各地における革命運動の勃興と言った騒然とした世情を背景として書かれたことは想像に難しくなく、海のカオスとは革命の謂いであることは容易に理解できる。ただし、チュッチェフにとって海のカオスの中から再構成されるのは、革命ではなく神意の秩序であった。後年の政論「ロシアと革命」には革命の業火の中に滅びるヨーロッパの上に箱船のごとく浮き上がるロシア、という黙示録的なイメージがあるが<sup>20)</sup>、この詩にその萌芽を見ることが出来る。

### 不眠症<sup>21)</sup>

時を打つ一様な時計の音、  
退屈な夜の物語！  
その言葉は誰にとっても等しく他人事で  
それでいて各人に分かりやすい、良心のごとくに！

我々のうちの誰が、愁いなく聴いたのか、  
全世界的な沈黙の中で、  
時の低いうめき声を、  
予言的な別れの声を！

我々には思われる：身寄りのない世界に  
打ち勝ちがたい宿命（原文大文字）が降りかかった —  
そして我々は、戦いの中で、全自然によって  
我ら自身へと委ねられている；

そして我々の人生は我らの前に立ちはだかる、  
地の果ての幻のごとく、  
そして我らの時代と友人たちとともに  
薄暗い彼方で色あせる；

そして新しい、若い世代は  
他方で、日差しの中で輝いた、  
だが私たちを、友よ、そして私たちの時代を、  
忘却で久しく埋め込んだ！

ただ時には、悲しい儀式を  
夜半の時間に行いながら、  
金属の甲の声は  
時折我らを悼んですすり泣く！

眠れぬ夜を一人、時計の音を聞きながら人生のはかなさについて考えているのであろうか、暗く、陰鬱な詩である。「無題（草原からトビが飛び立った……）」<sup>22)</sup>と同様に、自然に対する人間の無力さが描かれている。死を運命づけ

られている人間は、身より無く、孤独な戦いを続けながら、時の流れの中で必然的に過去のものになり忘却される。「無題（聖なる夜が地平線に上った……）」<sup>23)</sup>においてチュツチェフは、夜のカオスを前にして「家のない孤児」のように「弱々しく裸で立っている」人間を描いているが、そこに通じる人間観である。この詩もまた「最後の大変動」と同様、1829年以前の作とされている<sup>24)</sup>。

### 問題（ハイネから）<sup>25)</sup>

海の上、荒々しい夜半の海の上に  
若者が立っている —  
胸には愁いを、頭には疑問を —  
そして陰気な、彼は、波に問う：  
「おお、人生の謎掛けをお許ください、  
恐ろしく昔からの謎掛けを、  
それに何百何千の頭が、  
象形文字の刺繍で飾られた、  
エジプトやバビロニアの帽子をかぶった頭が、  
ターバンや、ミトラ帽や<sup>26)</sup>、修道帽をかぶった頭が、  
カツラを付けたものも剃り上げたものも —  
無数の哀れな人間の頭が  
目を回し、やつれ、汗かいた —  
教えてください、人間とは何かを？  
それはどこから来てどこへ行くのかを、  
そして天穹の上には誰が住んでいるのかを？」  
相変わらず波は騒ぎ、ざわめいている、  
風は吹き、黒雲を押し流している、  
そして星は冷たく明るく光っている —  
愚者は立っている — そして答えを待っている！



ハイネの「Fragen」(1827)を訳したもので1830年秋までに書かれたものとされている<sup>27)</sup>。人生についての思索が込められている。「人間とは何か」「どこから来てどこへ行くのか」といった人生に関する問が提起されているが、作者はあらかじめそれへの返答を放棄している。人生とは有限でしかもその意味はあらかじめ与えられたものではないのだ。上記の「不眠症」にも共通する人生観である。ミュンヘンでチュツチェフがハイネと個人的に知り合ったのは1828年2月から3月の間とされているが<sup>28)</sup>、それ以前にもチュツチェフはハイネの詩をロシア語の詩に翻訳している。この詩に表わされた思想もチュツチェフ自身の思想ではないが、当時のチュツチェフの興味を引いた、という点で彼の思想を分析する手がかりになる。

### 白鳥<sup>29)</sup>

鶯をして雲の彼方  
稲妻の激発に会わしめよ  
そして据わった瞳によって  
己が内に太陽の光を飲み込ませよ<sup>30)</sup>。

だが、より羨ましきはなし、  
おお純粋な白鳥よ、汝の運命よりも —  
汝がごとく、純粋な自然<sup>スチヒヤ</sup>によって  
神は(原文大文字)汝を包み給もうた。

それは、二つの無底の間で、  
汝のすべてを見通すの夢を慈みたもうた —  
そして星天穹のあふれるばかりの栄光で  
汝は四方八方を囲まれている。

制作年は1820年代の末と考えられている<sup>31)</sup>。「雲の彼方」に飛翔し「稲妻の激発」に出会い「太陽の光」さえ「己が内」に「飲み込む」「鷺」と「自然」<sup>スチヒヤ</sup>に包まれてたたく「白鳥」との対比である。能動的な（会う・飲み込む）昼・鷺と受動的な（包まれた・囲まれている）夜・白鳥との対比でもある。自力で飛行する「鷺」に対して「白鳥」は空と水という「二つの無底」の間で寄って立つ足場もなく、限りなく不安な状態でまどろみ漂っている。しかしチュッチェフは、この「自然」<sup>スチヒヤ</sup>に包まれている「白鳥」を「鷺」の上位に置く。後に彼によって著される一連の政論において展開される、自立した個人のエゴを組み合わせて構成された西欧社会と全一的な正教精神によって結ばれたロシアの社会とを比較を連想させる対比である。上空の鷺と水上の白鳥という「上下」の対比は、後の政論においては西欧とロシアという「東西」の関係に転換されたともいえよう。

### 無題<sup>32)</sup>

大海が地球を覆うがごとく、  
 地上の生活は周りを夢に囲まれている；  
 夜になる——すると響き渡る波によって  
 自然<sup>スチヒヤ</sup>は自らの岸を打つ。

それは自然の声：それは我等にせがみ、求める……  
 すでに波止場には魔法の小舟がよみがえり；  
 潮が満ちると一気に我らを運び去る  
 暗き波間の無限の中へ。

星の栄光によって輝く天穹は、  
 深みから神秘的なまなざしを向ける、——  
 そして我々は航行する、光り輝く無底に

周り一面囲まれて。

すでに見てきたようにチュッチェフにとって昼とは物事が輪郭を持つ世界、つまり主体と客体に対立して弁証法が働く、活動の世界であった。それに対して夜は、物事が輪郭を失うカオスの世界であり、それゆえ弁証法の働かない静寂の世界でもあった。同様に、人間にとって昼は活動と理性の領域であるのに対して、夜は眠りと非理性の領域であった。この詩においても、夜の眠りに落ちた人間は「自然の声」を理解し、自然の波動と同調するのだ。

チュッチェフにとって夜とは万物が輪郭を失うカオス、そして夜空は底知れないカオスの無底であった。ところが星はそのカオスの無底で己の存在を主張して輝く。上記の「白鳥」にも夜空の星が登場するが、この詩においても寄る辺もなく漂う「我ら」を囲み、夜空からまなざしを向けている。とすればチュッチェフにおいて星とは、物質を超えた存在、夜空のカオスのさらに向こうに存在する存在、つまり霊的存在の謂いであると解釈できる。検閲の日付から1828年から30年の間の作とされている<sup>33)</sup>。

### 無題<sup>34)</sup>

星になれたらと魂は望んでいる；

ただし、夜半の空から

この星たちが、生ける瞳のように、

眠れる地上の世界を眺めるときではなく、――

昼間、照りつける太陽の光線の

幻影によって、それらが覆い隠され、

それらが、神々のごとく、より明るく燃え輝くときに

透明で不可視のエーテルの中で。

魂と星、というローマン主義的なモチーフだが、この詩には「夜半の空」より「昼間、照りつける太陽の光線」の元の方が星は「より明るく輝く」という逆説が込められている。チュッチェフは一般的な常識を転倒して、暗い夜空よりも明るい昼の方が星の光が「より明るく輝く」、と詠う。星と地上との、光を媒介とした直接的、機械論的な結びつきよりも、魂と星との有機的な絆を重視するのである。この逆説は、次にあげる「SILENTIUM!」にも現われている。

さて、昼と夜との関係について「昼と夜」<sup>35)</sup>、「無題（聖なる夜が……）」<sup>36)</sup>で指摘したように、チュッチェフにとって昼とは夜の上に覆われた「覆い」の「布」のようなものであった。昼の訪れとは、昼が夜に取って代わるのではなく、夜という本質の上に昼が覆い被さる、というのが彼による昼のイメージである。この詩においても上記の「無題（大海が地球を覆うがごとく……）」と同様に「星」が登場しているが、チュッチェフにとっての「星」とは、夜という無底のさらなる彼方、物質世界を超越した世界に存在する霊的な存在なのかもしれない。夜のカオスはその奥底で霊の世界へとつながっているのだ。

### SILENTIUM ! <sup>37)</sup>

黙せ、隠れよ、そして隠せ  
 己の感情も夢想も —  
 心の奥底で、  
 それが昇り、そして沈むように  
 夜の星々のように、無言で、—  
 それらを愛でよ — そして黙せ。

心はいかに自らを語れようか？  
 他人はいかにおまえを理解せようか？  
 その人には分かるだろうか、何によっておまえが生きるかを？

口にされた思想は虚偽なのだ —  
おまえは泉を激発させ、かき乱す、  
それを糧とするがいい — そして黙せ……

ひたすら己自身の中でのみ生きるを得よ —  
おまえの魂の中には十全なる世界がある  
神秘的で魔法のような想いの —  
その想いを外面の喧噪がかき消し、  
昼の光線が追い払う —  
その歌声に耳を傾けよ — そして黙せ！……

上述の「無題(星になれたら……)」と同様にコミュニケーションの逆説である。この詩においてчувтчеフは「口にされた思想は虚偽なのだ」と断じ、ひたすら沈黙することを求める。「無題(星になれたら……)」が光を媒介としたコミュニケーションだったのに対してこの「SILENTIUM!」は言葉を媒介としたコミュニケーションの逆説をテーマにしているのである<sup>38)</sup>。言語を介した合理的で機械論的な結びつきよりも主観的で有機的な結びつきを、「通じさせる」より「自ずから通じる」を重視する、ローマン主義的なモチーフである。

### 無題<sup>39)</sup>

ここ、かくも生氣無く天穹が  
大地(原文大文字)を見つめるところで、—  
ここで、鉄の夢に包まれて、  
疲れた自然が眠る！……

ただ所々色あせた白樺が、

小さな藪が、白ばんだ苔が、  
熱病による夢<sup>ゆめまぼろし</sup> 幻のごとく、  
死んだような静寂を乱している。

30年5月中旬にチュツチェフは4ヶ月の休暇を取って家族とともに任地  
ミュンヘンからリュベック経由でペテルブルクへ旅立つ<sup>40)</sup>。再びミュンヘン  
に戻るのが10月の初めなのでその道中の印象を詩にしたものとするのが妥  
当である。ミュンヘンの華やかな社交界に慣れ親しんだチュツチェフの目にロ  
シア北部の土地は「生气無く」「死んだような静寂」が支配する、「疲れた自然」  
だったのだろうか。他方、約四半世紀を経て書かれた「無題(この寒村よ……)」<sup>41)</sup>  
では、同じくロシアの「貧相な自然」をテーマにしながらも、貧しいが故にロ  
シアの地にキリスト教の本質を見いだしている。

#### 無題<sup>42)</sup>

私はリヴォニアの原を通り抜けた、  
私の周りはずべてが物憂げだった……  
生彩のない空の背景、悲しげな大地（原文大文字）——  
すべては心に物思いを抱かせた……

私はこの地の悲しい過去を思い出した ——  
血にまみれた陰鬱なその時代を、  
埃の中で大の字に倒された、この地の息子たちが、  
騎士の拍車に接吻したときを……

そして、おまえを見ながら、荒れ果てた川よ、  
おまえをもた、岸辺の森よ、  
「おまえたちは、——と私は考えた、——遠くからやってきた、

おまえたちは、この過去とともに古い……」

だから！おまえたちだけに出来たのだ  
別の世界の彼岸から我らのところまで来ることが。  
おお、その過去についてたとえ一問でも  
答えを聞き出すことが出来たなら！

だが、自然よ、おまえの世界は過去の日々について黙す  
曖昧で秘密めいた微笑みを浮かべつつ、――  
夜の恍惚の、偶然の目撃者であった少年が、  
それについて昼間も黙し続けるように……

上記の「無題（ここ、かくも生氣無く天穹が……）」と同様に 1830 年の一時帰国の印象を詩にしたものだが、「リヴォニアの原を通り抜けた」と書かれていることから、リューベック経由でバルト海を渡った往路ではなく、帰りの道中の詩ということになりそうである。帰路の行程を示す資料は残されていないが、ペテルブルクで妻エレオノーラの二人の連れ子キリルとオットンを海軍士官学校に入れたため<sup>43)</sup>、身軽になった夫婦と娘アンナが、たとえばリガあたりまで陸路を旅した可能性はある。

荒涼とした草原を通過する情景が描かれているが、チュッチェフが実際にこの地を通過したのは 10 月初めである。「黄金の秋」ともいえる季節の草原が荒涼とした荒野として彼の目に映ったのは、この地がドイツ騎士団に侵寇された暗い過去への思索の故であろう。ところが自然は黙して語らない。すでに見てきたように、人生ははかなく、自然は人間の主観的願望とは無関係に動くからである。

秋の夕べ<sup>44)</sup>

秋の夕べの明るさの中には  
愛くるしく、神秘的な魅力がある！……  
木々の不吉な輝きと色どり、  
あかね色の葉の物憂げに擦れるかすかな音、  
静かで霞がかかった紺青  
空虚で悲しげな大地の上の  
そして、迫り来る嵐の予感のように、  
時折冷たい突風が、  
損失、疲労が——それもすべてのものに  
かの凋落の穏やかな微笑みがある、  
それを我々は理性的な人間の中の  
神授の受難の引け目と呼ぶ！……

理性的とも万物の霊長とも言われる人間の生命の有限性を詠んだ詩。神によって楽園を追放された人は、有限の生という「引け目 стыдливость」を背負って生きていくのだ。「二つの声」<sup>45)</sup>、「無題(見よ、川面の広がり……)」<sup>46)</sup>にも通じる人生観である。人間の願望とはうらはらに自然の独自の法則によって季節は移ろい、人間は死ぬべき運命にあるのだ。しかも理性はそれに対する解答を用意していない。この詩もまた 1830 年の作とされている<sup>47)</sup>。

木の葉<sup>48)</sup>

松や樅を  
冬じゅう立たせるがいい、  
雪や霰に



身を包みながら、眠らせるがいい —  
そのひ弱な緑は、  
ハリネズミの針のように、  
永遠に黄ばむことはないが、  
永遠に鮮やかではない。

我ら軽き種族は、  
青々と繁茂しよう輝こう  
短い時間でも  
枝の上に留まろう。  
美しい夏の間じゅう  
我らはあらん限り美しかった —  
光線と戯れ、  
露で水浴した！……

しかし小鳥のさえずりは止んだ、  
花は咲き終わり、  
光線は色あせた —  
ゼピュロスは去った。  
なのに我らは何が故に無為に  
ぶら下がり黄ばむのか？  
それらに続いて  
我らもまた飛び去った方が良くないか！

おお、荒れ狂う風よ、  
はやく、もっと早く！  
はやく我々を吹き飛ばせ、  
執拗な枝から、

吹き飛ばせ、吹き払え、  
我らは待ちたくない、  
飛べ、飛べ！  
我らはあなたと飛ぶ！……

上記の「秋の夕べ」と同様に、木の葉に仮託して人生のはかなさを詠った作品である。この詩において「秋の夕べ」で解決できなかった人生の有限性に対する、当時のチュッチェフなりの解答を見ることが出来る。それは「短い時間」であろうと精一杯、生き、輝くということだった。そして時が来たなら潔く去るのだ。人生に対する一種の諦観、あるいは目的論的人生観を否定した上述の「問題（ハイネから）」と合わせて考えるなら、そこにチュッチェフ流の実存主義を見ることが出来る。上記の「無題（私はリヴォニアの原を通り抜けた……）」「秋の夕べ」と同様に1830年の作とされている<sup>49)</sup>。

#### 無題<sup>50)</sup>

何を吠えているのか、夜の風よ？  
何をそんなに嘆いているのか、狂ったように？……  
おまえの不可解な声は何を意味しているのか、  
あるときは低く悲しげな、あるときは騒がしく？  
心に分かる言葉で  
おまえは不可解な苦しみについて繰り返す――  
おまえは胸の中を掘り返し、爆発させるのだ  
時にすさまじい音を！……

おお、その恐ろしい歌を歌うなかれ  
太古の**カオス**（原文大文字）についての、生まれについての！  
夜の魂の世界は何とどん欲に

このお気に入りの物語に耳を傾けるのか！  
それは死を運命づけられている者の胸を打ち破り、  
無限と融合せんと熱望する！……  
おお、嵐よ、眠っている者を起こすなかれ、  
彼らの下には**カオス**がうごめいている！……

すでに見てきたように、チュツチェフにとって物事の外見がはっきりと見える昼に対して、外見が定まらない夜はカオスであった。それと同時に人間にあっても、理性が支配する昼に対して夢が支配する夜はカオスである。この詩において、人間は夜の夢の世界で自然とつながっている。自然の息吹きたる夜の風の音によって眠っている人間の中で、理性の下に横たわる意識下の「自然」が目を覚まし夜の**カオス**と共鳴するのである。H. C. ガガーリンに 1836 年 5 月に送られたものであることから、それ以前の作とされている<sup>51)</sup>。

### 無題<sup>52)</sup>

何でおまえは水の上にしならせるのか、  
ヤナギよ、その梢を！  
飢えた口のような、  
そよぐ葉によって、  
よどみのない流れをとらえるのか？……

たとえ苦悶しようとも、たとえ不安で身を震わせようとも  
おまえの葉一枚一枚が流れの上で……  
流れは流れ去りしぶきを立てる  
そして、日なたで温まりながら、輝き  
おまえを嘲笑するのだ……

動くことが出来ないヤナギが流れ去る水の流れをとらえようとしてもがいている。主観的願望と客観的条件のずれ、人間の限界を感じさせる。「無題(草原からトビが飛び立った……)」<sup>53)</sup>にも通じる人生観である。正確な制作年は特定されていないが1830年代の作とされているので<sup>54)</sup>、ミュンヘンの在外公館での自らの境遇をヤナギになぞらえたものと考えるのが自然であろう。

無題<sup>55)</sup>

かくして柩は墓穴におろされ、  
皆は周りに押し寄せた……  
押し合い、努めて息をしている、  
腐臭が胸を詰まらせている……

開かれた墓穴の上で  
柩が置かれた枕元で、  
碩学の、威厳のある牧師が、  
弔いの言葉を皆に語る……

人生のはかなさを厳かに曰う、  
原罪を、キリストの血を……  
賢明で、礼に適った言葉に  
群衆はてんでに心を奪われた……

が、空はかくも不朽で澄み、  
かくも大地の上に無限なり……  
そして鳥たちは声高らかに高く舞う  
空色の空気の無底の中を……

上述の「無題 (何を吠えているのか、夜の風よ……)」と同様に И. С. ガガーリンに 1836 年 5 月に送られたものであることからそれ以前の作とされている<sup>56)</sup>。チュッチェフに特有な二項対立の構造である。人生のはかなさに空＝自然の「不朽」が、墓穴の「腐臭」と空の「澄み」、牧師の「弔いの言葉」に「声高らか」な鳥たちが対比されている。永遠の自然と人生のはかなさという意味では、「無題(見よ、川面の広がり……)」<sup>57)</sup>にも通じる主題である。それと同時に、この詩からはチュッチェフのプロテスタント式の葬儀に対するさめた態度を読み取ることも出来る。とはいえ、これを 1834 年の作とされる「無題(ルーテル教徒の礼拝が好きだ……)」<sup>58)</sup>に見られるプロテスタントに対する好意的な姿勢と合わせて解釈するなら、プロテスタント式の葬儀に限らず葬儀一般、さらには人生一般に対するさめた態度のあらわれととらえるべきかもしれない。

### 無題<sup>59)</sup>

我が魂よ、影たちのエリュシオンよ<sup>60)</sup>、  
明るくすばらしい無言の影たちの、  
この荒れ狂う時代の思惑にも、  
喜びにも、悲しみにも関係ない影たちの！

我が魂よ！影たちのエリュシオンよ、  
実生活とおまえとの間に何が共通なのか！  
おまえたち、過ぎ去りし最良の日々の幻と、  
この無関心な群衆との間に？……

この詩も「無題(かくして柩は墓穴におろされ……)」と同様に И. С. ガガーリンに 1836 年 5 月に送られたものであることからそれ以前の作とされている<sup>61)</sup>。この詩もまた二項対立の構造を持つ。英雄や善人たちの魂の宿る極楽浄土

のエリクションたる作者の魂=内面の「静寂」と「この時代」=外面の「荒れ狂う」が対比されている。「無題（私はリヴォニアの野を……）」と同様に、過去の歴史は作者の内面に、外界との回路を持たぬままに密閉されている。

無題<sup>62)</sup>

いや、おまえへの私の切愛を  
隠すことは出来ない、母なる大地（原文大文字）よ。  
肉体を持たない魂たちの情欲を、  
おまえの実の息子、私は渴望しない——  
おまえの前では天国の喜びが何あろう、  
恋知りそめし時、春の季節、  
五月の花開く至福、  
バラ色の光、黄金色の夢？

一日中まったく無為に  
春の、暖かい空気を吸うことか、  
清らかで高い空に  
しばし雲を追うことか、  
用事も目的もなく彷徨うことか  
そして偶然に、素早く、  
ライラックの新鮮な香りに  
あるいは幸福な夢に出会うことか？

この詩も「無題（かくして柩は墓穴におろされ……）」および「無題（我が魂よ……）」と同様に H. C. ガガーリンに 1836 年 5 月に送られたものであることからそれ以前の作とされている<sup>63)</sup>。魂の世界の実態のない「情欲」に「大地」の現実的な喜びを対比した上で、作者のチュッチェフは後者に価値を置く。その

点でローマン主義的な作品とは一線を画す。また、**大地**を大文字で始めて擬人化していることから、ここにチュッチェフの汎神論的な傾向を読み取ることも出来よう。

### 海上の夢<sup>64)</sup>

海も嵐も我らの小舟を揺すっていた；  
私は、眠り、波の思うが儘にゆだねられていた —  
私の中に二つの無限があった、  
それらは勝手に私をもてあそんでいた、  
私の周りでは、シンバルのように、岩礁が鳴っており、  
風が互いに呼び交わし高波が歌っていた —  
私は音のカオスの中で耳を裂かれて横たわっていた、  
しかし音のカオスの上では私の夢が駆け回っていた。  
異常に明るい、魔法のように無言の、  
その夢は轟く闇の上に軽く漂った……  
暑熱の光線の中でそれは自らの世界を広げた —  
大地は青く萌え、エーテルは光を放っていた……  
迷宮庭園、豪邸、円柱、  
そして無言の大群衆がひしめいていた —  
私は多くの見知らぬ人々を知り、  
魔法の動物を、神秘的な鳥を見た……  
被造物の上空を、私は神のごとく、闊歩していた、  
私の足下で不動の世界が輝いていた……  
だがすべての夢見を貫いて、魔法使いたちの罵声のごとくに、  
私には海の深みの轟きが聞こえた、  
そして夢と幻の静かな領域に  
うなる高波の泡は押し入った……

「SILENTIUM！」で対比された自身の内面の「神秘的で魔法のような」「十全なる世界」と「外面の喧噪」と「昼の光線」との対比に通じる、「音のカオス」と「夢と幻の静かな領域」、海のカオスと夢のコスモスを対比した、これも二項対立の構造を持つ詩である<sup>65)</sup>。しかも作者は自らの内の意識の世界と潜在意識の世界を行き来している。1829年夏の作とされている<sup>66)</sup>。

### むすび

今回解釈したのは、1830年頃までの、比較的早期の作品であった。これらの多くは強くローマン主義の影響を感じさせるものであった。とはいえ、中には啓蒙的なものや一種の実存主義的な要素を見ることもできた。それらの内在的連関を明らかにするためにも、さらに詩の分析を続ける必要があろう。

### 注

- 1) Быков П. В. ред. Ф. И. Тютчев полное собрание сочинений. С-Пб, 1911.
- 2) Новиков А. И. сост., Замалеев А. Ф. отв. ред. Русская философская поэзия. С-Пб, 1992.
- 3) Тарасов Б. Н. сост. Тютчев Ф. И.: Россия и Запад. М., 2007.
- 4) *Тютчев Ф. И.* “\*\*\*”(Всесилен я и вместе слаб...) // Полное собрание сочинений и письма в шести томах (далее “Тютчев”). М., 2002. Т. 1. С. 14.
- 5) См. Пигарев К. В. сост. Ф. И. Тютчев: Сочинения в двух томах. М., 1984. Т. 1. С. 230.
- 6) См. *Державин Г. Р.* “Бог” // Сочинения. С-Пб, 2002. С. 58.
- 7) *Тютчев* “К оде Пушкина на вольность” // Тютчев. Т. 1. С. 27.
- 8) ミュティレーネのアルカイオス。古代ギリシアの抒情詩人。レスボス島のミュティレーネで生まれ、反乱と政争に深く関与した。



- 9) 先行訳については坂庭淳史、早稲田大学大学院文学研究科博士論文『フォー  
ドル・チュツチェフ研究』2004年、45-46頁参照。
- 10) 邦訳は稲田定雄訳『世界名詩集 23 プーシキン』、平凡社、昭和43年、24-30  
頁。
- 11) См. Комментария // Тютчев. Т. 1. С. 287.
- 12) 「1825年12月14日」については拙稿「Ф.И.チュツチェフ政治詩試訳(5)」、  
『文化と言語』第67号、2007年11月、88-89頁参照。
- 13) *Тютчев* “Проблеск” // Тютчев. Т. 1. С. 52.
- 14) 18世紀末から19世紀初めにヨーロッパで流行した楽器。自然の風によっ  
て起こされる乱気流によって弦を振動させ、神秘的な音色を出す。
- 15) ゼピュロス：ギリシア神話における暖かいそよ風を運ぶ西風の神。
- 16) См. Комментария // Там же. С. 309.
- 17) *Тютчев* “Последний катаклизм” // Там же. С. 74.
- 18) См. Комментария // Там же. С. 334.
- 19) 拙稿「政治詩試訳(5)」、90頁参照。
- 20) См. *Тютчев* “La Russie et la Revolution” // Т. 3. С. 54.
- 21) *Тютчев* “Последний катаклизм” // Т. 1. С. 75.
- 22) 拙稿「政治詩試訳(5)」、100頁参照。
- 23) 同上、104頁参照。
- 24) См. Комментария // Там же. С.335.
- 25) *Тютчев* “Вопросы (Из Гайне)” // Там же. С. 82.
- 26) ミトラ：太陽神ミトラを主神とするインド・イランの古代宗教。
- 27) См. Комментария // Там же. С. 337.
- 28) См. *Динесман Т. Г. и др.* Летопись жизни и творчества Ф. И.  
Тютчева. Кн. 1. С. 78.
- 29) *Тютчев* “Леведь” // Т. 1. С. 109. 先行訳については坂庭博士論文、  
30頁参照。
- 30) 6巻本では солнце となっているが他の出版では солнца となっている。

チュツチェフによる「白鳥」の手稿は残っていないため、チュツチェフの生前、1839年に『同時代人』に始めて発表されたテキストを正本と考えるべきである。солнцаとした『同時代人』テキストをсолнцеとした「異本」についても6巻本においては言及がないのでおそらく誤植と考えられる。ここではсолнцаとして解釈する。

- 31) См. Комментария // Т. 1. С. 361.
- 32) *Тютчев* “\*\*\* (Как океан объемлет шар земной...)” // Там же. С. 110. 包まれたり囲まれたりする「卑小さ」という側面からチュツチェフの人間像を分析した坂庭氏による先行訳については坂庭博士論文、23-24頁参照。
- 33) См. Комментария // Т. 1. С. 362.
- 34) *Тютчев* “\*\*\* (Душа хотела б быть звездой...)” // Там же. С. 115. 先行訳については坂庭博士論文、63頁参照。
- 35) 拙稿「政治詩試訳(5)」、102-103頁参照。
- 36) 同上、105-106頁参照。
- 37) *Тютчев* “SILENTIUM!” // Т. 1. С. 123. 先行訳については坂庭博士論文、30頁参照。
- 38) その点、「無題（星になれたら……）」とあわせて「SILENTIUM!」を論じた坂庭氏の解説は説得力がある。坂庭博士論文、59-60頁参照。
- 39) *Тютчев* “\*\*\* (Здесь, где так вяло свод небесный...)” // Т. 1. С. 119.
- 40) См. Летопись. Т. 1. С. 101.
- 41) 大矢他「Ф. И.チュツチェフ政治詩試訳(3)」、『文化と言語』第65号、2006年11月、201-202頁参照。
- 42) *Тютчев* “\*\*\* (Через ливонские я проехал...)” // Т. 1. С. 124.
- 43) См. Летопись. Т. 1. С. 103.
- 44) *Тютчев* “Осенний вечер” // Т. 1. С. 126. 先行訳については坂庭博士論文、171-172頁参照。
- 45) 拙稿「Ф. И.チュツチェフ政治詩試訳(6)」、『文化と言語』第68号、2008年3月、111頁参照。

- 46) 同上、112 頁参照。
- 47) См. Комментария // Т. 1. С. 389.
- 48) *Тютчев* “Листья” // Там же. С. 127.
- 49) См. Комментария // Там же. С. 391.
- 50) *Тютчев* “\*\*\* (О чем ты воешь, ветер ночной...)” // Там же. С. 133.
- 51) См. Комментария // Там же. С. 397.
- 52) *Тютчев* “\*\*\* (Что ты клонишь над водами...)” // Там же. С. 136.
- 53) 拙稿「Ф. И. Чyтчeф政治詩試訳(5)」、『文化と言語』第 67 号、2007 年 11 月、100 頁参照。
- 54) См. Комментария // Там же. С. 404.
- 55) *Тютчев* “\*\*\* (И гроб опущен уже в могилу...)” // Там же. С. 138.
- 56) См. Комментария // Там же. С. 406.
- 57) 拙稿「政治詩試訳(6)」、112-113 頁参照。
- 58) 拙稿「政治詩試訳(5)」、98 頁参照。
- 59) *Тютчев* “\*\*\* (Душа моя, Элизиум теней...)” // Там же. С. 142.
- 60) ギリシア神話で影の国にあり魂が住む極楽浄土。
- 61) См. Комментария // Там же. С. 412.
- 62) *Тютчев* “\*\*\* (Нет, моего к тебе пристрастья...)” // Там же. С. 144.
- 63) См. Комментария // Там же. С. 417.
- 64) *Тютчев* “Сон на море” // Там же. С. 151.
- 65) 先行訳および「SILENTIUM！」との対比については坂庭博士論文、67-68 頁参照。
- 66) См. Комментария // Там же. С. 424.